

# ベルくんとヒロイン達の睦言

黒々清流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンまちのエツチな話、話ごとに世界観は繋がっていたり繋がってなかつたり。

ベルくんが色々なヒロインと色々な意味で仲良くなっていく話です。

時系列や関係性はガン無視します。もしかしたらTSキャラもあるかも…？

タグは現在書いている話のヒロインが出ています。ベルくんがおっせつせする人ごとに増えるごとに増えていきます

## 目次

### レフィーヤ編

レフィーヤ・ウイリデイスの秘め事(1)

レフィーヤ・ウイリデイスの秘め事(2)

レフィーヤ・ウイリデイスの秘め事(3) 終

### リニュー編

疾風と恋(1)

疾風と恋(2)

疾風と恋(3)

疾風と恋(4) 終

### アイズ編

剣姫は性に興味津々です(1)

36

31

27

23

19

12

7

1

## レフィーヤ編

### レフィーヤ・ウイリデイスの秘め事(1)

「ねえねえ、レフィーヤ最近綺麗になったよね」

「え、そ、そうですか?」

ここは昼過ぎのロキファミアリアの食堂、昼食後にティオナはレフィーヤを見ながらそう呟く。

そういうレフィーヤは頬に手を当てて首をかしげる。レフィーヤは外行きの服を着ており、これからどこかへと出かけるようだ。

「うん、肌の艶もよくなったし何か始めた?」

「え、ええつと…とくには何も…」

「それにこれから出かけるの? 外行きの服だし、もしかしてデート?」

「あ、あのえつとその…い、行ってきます!」

質問攻めにあつたレフィーヤは目をぐるぐるとさせるともはや答えられないと思つたのか急いで外へと走つていった。ティオナの後ろからティオナがあきれたような声を上げる。

「質問しすぎよ、レフィーヤが困つてたじゃない?」

「えー、でも気にならない?」

「どうせアイズとでしょ? あそこまで気合入れてるんだし」

「…私がどうかした?」

二人がそういう話をしているとアイズがいつも通りの服のまま食堂へとやつてきた。

二人に対して首をかしげる。

「あれ? ねえねえアイズ。今日レフィーヤと何か約束してる?」

「え? してないよ。ダンジョンに潜るか聞いたら明日は用があるから無理つては言われたけど」

「レフィーヤがアイズの誘いを断つた!」

するとティオナとティオナは互いに顔を見合わせ

「やつぱりおかしいわよ、いったい誰と会うのかしら」

「うん、気になるよね。でも今日はダンジョンに行かないといけないよ」

「アイズは…非番だったわよね…!」

「え…うん」

「お願いがあるんだけど…!」

「…なんで」

アイズは一応変装をしてレフイーヤを追っていた。双子に頼まれたからだが正直本人も何故尾行しているかはさっぱりわかってない。

レフイーヤはとある場所に到着すると髪形をいじったり服装を何度も見直したりしている。その様子を観察しているとそこに一人の少年が駆け寄ってきた。雪のような白い髪と真紅の瞳を持ち、華奢な体格をした兎のような印象を受ける。

「レフイーヤさんごめんね。少し遅れちゃった」

「いいえ、私も今来たところですよ。じゃ、行きましようか」

「…ベル?」

レフイーヤが待っていた相手はベル・クラネルだった。二人は腕を組みながら街へと繰り出す。

二人は楽しそうに笑顔で会話をしながら服屋や小物の店を回っている。

今は出店でクレープを買って二人で食べていた。あ、いま食べさせあっている。

「…じゃが丸くんの方がいいのに」

そういいながらアイズは近くの出店で買ったじゃが丸くん小豆クリーム味を食べていた。

そのまましばらく追っていると二人の様子、正確にはレフィーヤの様子がおかしい。頬を真っ赤に染めてどこかしら妖艶な雰囲気も放っている。アイズはそういう感情に詳しくないためか暑いのかなと思っっている。

そしてレフィーヤはベルの手を引き、林の中へと入っていった。

そこでアイズは思い出す、あそこには確かちよつと木が開けたところにベンチが一つあってお昼寝に最適な場所だった。アイズもたまたま昼寝をしていたことを思い出す。

「ベル達もお昼寝かな」

しばらく待ってみたが流石にもう帰ろうかと思っただけで最後になんかしてやるのかなと近づいた瞬間。

「…あつ…ん…っ！」

「…え」

レフィーヤの妙に艶っぽい声と手を叩くような音に脳に甘く響く水音がアイズの耳に届く。聞いていると何故かアイズは頬を赤く染め、自身の下腹部を押さえた。アイズ自身も何故そのような行動をとったか分からないのか目を白黒させている。

「…ん、んう…ん…っ！ あつ…！」

「…っ！ うあつ…！ レフィーヤ、さん…っ！」

「あ…ああ、あああ…っ！ い…イク…っ！」

その二人の声と同時に叩く音と水音が収まった。アイズは自らの異変に混乱しながらもベンチがあり二人がいるはずの場所を見た。

「…っ！」

そこには半裸の二人がいた。レフィーヤはベンチに片手を置き、もう片手はベルに掴まれている。腰は後ろに突き出しており、ベルの腰と合わさっていた。二人は息を荒くしており頬を赤らめている。

「まだ…できますか…？」

「うん…まだ、出来るよ…もう一回…したい？」

「うんっ♡ もう一回…して？」

「動く…よ…っ！」

「あつ…！」

そう二人が会話をするとベルが腰を動かし先ほどの叩く音と水音が聞こえ。じゅぷつ、ぶちゅつ、という音がアイズの耳から脳を犯す。ベルの腰がレフィーヤの腰を叩くたびにレフィーヤの口から官能的な声が漏れる。

「はあ…っ！ あっ…！ 三回目え…！ なのにい、硬いまま…！  
あん…っ！」

「……………」

「ああん…っ！」

ベルが腰に当てていた左手を離し。15歳にしては豊満なレフィーヤの胸を掴み、レフィーヤは歓喜の声をあげた。

レフィーヤの顔は蕩けきつていると言ってもいい表情をしており口元からは涎が垂れている。

「ベル…」

「レフィーヤさん…んっ」

レフィーヤが体を起こし顔をベルの方へと向けて口を合わせる。性知識が乏しいアイズでもキスのことは知っているが

「……………んむ、むう、んちゅ」

「ん…じゆる…んむ…」

二人は互いに舌を伸ばし絡ませていた。ベルはぴちやぴちやと音を立てながら舌を絡ませ腰を動かし、胸を揉む。三か所を同時に攻められているレフィーヤは喘ぎ声を漏らしながら自らも腰を振る。顔は蕩け口元からは涎が垂れており、太ももには透明な液体が伝っている。

互いに口を離すと銀色の糸が引いており、ぷつりと切れて互いの胸元へとかかる。

「レフィーヤ…さん…っ！ もう…で…っ！」

「いいです…よお…っ！ いっぱい…最後まで…中…でえ…っ！」

ベルが腰を動かすのを速めていき。ぶちゅぶちゅという音がだんだんと大きく速くなっていき。レフィーヤの声がどんどん大きくなる。

「ベル…っ！ 奥にい…っ！ 一番…奥にい…っ！」





くんっ

「……………ッ?!?!?!」

その匂いに全身が震え思わず自らの体を抱きしめる。びくびくと震えさせ。その衝撃に頭が混乱する。

正直に言うならひどく生臭い臭いがした。だがもつと嗅いでいたくなるような匂い。もつともつと嗅ぎたいと体が訴えている。

「なに…これ…」

アイズは再度下腹部、正確には先ほどレファイヤがベルのモノを差し込まれていた場所に手を当てる。

くちゅり…

触ったところは湿っておりアイズはそのことに驚く

「私の体…おかしくなっちゃった…っ」

その後、アイズはふらふらしながら黄昏の館へと帰宅した。

## レフイーヤ・ウイリデイスの秘め事（2）

く 二ヶ月前 く

「…うへへへ」

とある日のロキファミアの食堂にて、レフイーヤ・ウイリデイスは浮かれていた。それはもう盛大に浮かれていた。

前日の夜、恋仲であったベル・クラネルとどうとう一線を越えることが出来たのである。レフイーヤから誘うことにはなつたが後はベルがリードしてくれていた。互いに初めてということもあり、少しはぎこちなくレフイーヤも恥ずかしがっていたが最終的にはベルの上で淫らに踊っていたので問題はなさそうだ。

つまりレフイーヤはいまとても幸せなのである。昨日帰るのが遅くなり湯浴みが出来ずに服を変えただけが朝の訓練終わりの後に湯浴みをすれば良いかなと楽観的に考えていた。

そのままスキップでもしそうな雰囲気で訓練所に向かおうとする。

「おい」

不機嫌丸出しといった声色で呼び止められた。周りには誰もいないので自分が呼ばれていると知つたレフイーヤは誰の声なのか即座に理解しながら先ほどのほわほわオーラが消え去り不安げな表情で後ろを向く。

そこには【凶狼】の二つ名で知られるベート・ローガが不機嫌を一切隠そうとせずにレフイーヤを睨んでいた。

「な、なんででしょうか」

レフイーヤが何を言われるかとびくびくしながらも答えると

「今すぐに風呂に入れ、くせえ」

と言つた。その言葉に少し間をおくとレフイーヤはカチンと来たのか先ほどのおどおどとした雰囲気捨ててベートに食って掛かる。

「なっ…！ いきなり人を呼び止めたと思つたら臭いとは何ですか！ 女性に対して失礼ですよ！」

そう、いつものようにロキに言わせればどこかの委員長のような声

で説教をしようとするがベートはめんどくせえと言った表情でぼそりと呟く

「いいからさっさと入れ、兎くせえんだよ」  
「…？」

レフィーヤは言葉の意味が理解できずに暫し固まる。兎臭い？レフィーヤはもちろん兎と触れ合っただけでもないしこのオラリオで兎に会うこと事態難しいことだろう。つまりベートが言っている兎とは動物の兎のことではない。

と、考えてからそういえばベートが兎と呼んでいたものことにレフィーヤは至る。そういえば彼は兎野郎と…

「ーッ?!?!」

そこまで考えてからレフィーヤは気づいた。そうだベートはベル・クラネルのことを兎野郎と呼んでいた。そして今はレフィーヤのことを兎臭いと言っている。そして昨晩は情事の後にレフィーヤはベルに抱き付きながらぎりぎりまで寝てしまいそのまま帰ってしまったので帰宅後の湯浴みもしていない。つまりベートがいま言っていることは…

レフィーヤは極限にまで顔を真っ赤にしてあわわわわと混乱する。ベートはめんどくさそうに首後ろをポリポリと搔くとため息を吐きながら今のレフィーヤに取っつてもありがたいことを提案する。

「ハア…俺が言っついてやるからさっさと行け、色ボケエルフ」  
「あ、ありがとうございますベートさああああああんっ!!!」

レフィーヤは全速力で浴場へと向かった。その後アマゾネス姉妹に追及されたり色々あったが少し後にはその話題も消えたためレフィーヤはほっとしたため息をついた。その後ベルとの情事後には必ず湯浴みをするようになったとか

・ベート・ローガ

鼻が利くため意図せずミアミア内の恋愛状況を知ったりしてしまう。

レフィーヤから兎野郎のにおいがしたときは二度見した。

今回は流石に兎臭がきつく。あ、こいつらやったな。ということも理解しておまけにこのレベルだともしかしたら他の奴も気づくかもとお節介を発動した。今作品のベートはいい兄貴してる。

ハーレム展開の短編とかあったら「アアツ!? (レフィーヤを見る) アアツ!? (アイズを見る) アアアアツ!? (ティオナとリヴェリアを見て)」とかなってそう。

～ 現在 ～

「……………」

レフィーヤとベルの情事を目撃したアイズは翌朝の食堂で朝食をとっていたがとてもぼんやりしており、食べようとしたミニトマトがぼろりと落ちる。その姿はまるで親友に「明日までに私のほうが先に大人になっちゃったらどうするか考えといて」と言われた女子中学生のようである。

それを少し離れているところでアマゾネス姉妹がぼそぼそ話して話していた。

「…ねえねえ。どう考えてもおかしいよね。昨日レフィーヤを尾行させてからアイズがなんかずつとぼーっとしてるよ」

「確かに妙ね…いったい何を見たのかしら」

「…もしかしてアルゴノウト君とレフィーヤがデートしてたりして! アイズってアルゴノウト君のこと気に入ってたし」

そんな感じで二人は色々な憶測を話している間アイズは様々なことを考えていた。

昨日二人が行っていた行為、実は似たようなことを本で見たことが

アイズにはあった。それを一度リヴェリアやフィンに聞いたことがあるがアイズにはまだ早いと言われた。ベートにも聞いたが二人と同じことを言われた。

三人には早いと言われたがアイズは16歳でレフイーヤは15歳だ。これは理不尽に感じてしまうことも仕方がないだろう。かといって人に聞かずに調べようにもどう調べればよいのかアイズには分からない、このファミリアにある本には載ってなかったし。

と、アイズが頭を悩ませた結果

「レフイーヤ、昨日ベルとしていたことってなに？」

本人に聞くことだった。現在はアイズがレフイーヤの自室に突撃してからの質問なのでごまかして逃げることも出来ない。レフイーヤは突然現れたアイズにも丁寧に対応していたがアイズから爆弾が投下された。

「ふええっ!? え、えつと…な、何のことですかー?」

「昨日ティオナ達に言われてレフイーヤを追ってたんだけどベルと二人で林に入った後にしてたこと」

「ぶっ?!?!」

レフイーヤはアイズから連続に告げられた爆弾に噴き出す、つまりは昨日の情事をぼつちり見られていたということ…

「あの…えつと…それh「昨日のを見てから体がおかしいの…」…え?」

レフイーヤがどうにか言い訳をしようとしているとアイズの言葉に疑問を返す。

そのままアイズは顔を赤らめながら体を押しさえ、熱に浮かされたような声で続ける。

「…見てから体が熱くなって…ここも濡れてきて…あの白いのを嗅いだら…体がおかしく…っ!」

「……」

アイズが自分の体を赤面しながら抱きしめるのをレフイーヤはと

ある感情に目覚めた。

それは一種の背徳感を感じるような不思議な感覚であつた。思わず心臓が高鳴り、僅かながらに息が荒くなる。

そして悪魔はレフィーヤに囁き。レフィーヤも、それを受け入れた。

「…アイズ、さん。今度の休日、空いてますか？」

その光景を想像したレフィーヤは、思わず生唾を飲んだ。

## レフイーヤ・ウイリデイスの秘め事（3） 終

「……少し狭い」

次のレフイーヤとアイズの休日重なった日、アイズはレフイーヤに教えられた部屋のクローゼットの中にいた。

レフイーヤが格安で買ったらしいその部屋はとてもシンプルでダブルベッドと大きな鏡が付いたクローゼットに棚ぐらいしかない。

「レフイーヤにここにいれば私の疑問の意味を教えてくださいと言ってくれたのだが……なんでここに

「……いつの間になんな部屋を」

「いつまでも外や宿を取るわけにはいきませんからね。安かったので買っちゃいました」

「……ッ！」

ドアを開けてベルとレフイーヤが入ってくる。アイズは思わず息をひそめた。クローゼットには覗き穴が開いており、アイズはそこから二人の様子を覗いている。

「レフイーヤさん……」

「ベル……んっ」

アイズの眼前で二人の唇が重なる。そのまま互いに舌が伸び絡み始める。淫らな水音が部屋に響き、アイズは頬を染める。そのままベルはベッドに腰かけ、そのベルの膝の上にレフイーヤは腰かける。

「……ん、レフイーヤさん。また胸大きくなつた？」

「あ……んっ……それ……ロキにも言われたん……ですよ……っ！　ベルがこうやって揉むからです……んっ」

服の上からレフイーヤの胸を揉んでいるベルに対してレフイーヤは何か気付いたのか顔を蕩けさせながら腰を揺らす。そのまま体を床へ下ろし、ベルの足の間に挟まるようにひざまづく。パンパンに押し上げたベルのズボンに顔を近づけるとスンスンと鼻を鳴らしうっとりとした声を上げる。エルフでありとても可愛らしい少女であるレフイーヤがこのような行為をしているだけでベルは興奮し、さらにベルのモノが強固になる。

「はあ…やっぱりベルのおつきい…」

レフィーヤがベルのモノヘズボン越しに頬ずりを始める。そして顔を離すと自らのシャツのリボンを外し、ボタンに手をかける。

「ベルのおかげで大きくなってきたこれでしてあげる。ベルこれ好きでしょ？」

レフィーヤはシャツのボタンを外すとそこそこ大きな胸を露出させる。そのままレフィーヤはベルの下着ごとズボンを下ろした。下着に引っかけたベルの年齢にそぐわない大きなモノがぶるんと飛び出す。

「ん…れる…」

「う…あ…」

レフィーヤは口の中に唾液をためるとベルのモノに垂らし、それを自らの胸で挟む。にちゃにちゃと音を立てながら胸を左右別々に揺らしベルのモノを刺激する。ベルは快楽に顔をゆがめて体をびくびくと震えた

「あつ…くっつ、でる…っ！」

「あつ…んんっ♡ はあ…熱い…」

ベルのモノから白濁が噴き出しレフィーヤの胸の上に白い水たまりを作る。独特の匂いが部屋中に広がりクローゼットにいるアイズにもその匂いが届きアイズは熱を持った下腹部に手を当てる。

「本当なら飲んであげたいけど。キスが出来ないから…んっ」

「ん…れる…レフィーヤさん本当にキス好きだね」

「んっ、好き…」

ベルとレフィーヤがキスをして舌を絡めた後。レフィーヤが片手で自らの下着を下ろし、べちゃりと濡れた下着を地面に落とし。ベルの膝の上に背を向けるように乗り。ベルのモノを自らの膣内に導く。

「うっ…ん…あはあ…っ！」

「うぐっ…なんか今日はいつもより…きつい」

「えへ…そうですかあ…？」

とレフィーヤはクローゼットに目を向ける。見ていたアイズはレフィーヤの蕩けた目と視線が合い、アイズは息を荒くし自らの手を下



腹部へと導く、ぴちゃりと水音がするがアイズは構わず手を動かし続けた。

ぐちゆりぐちゆりと湿った音が自らの下腹部から響き、口から熱い息が漏れる。

「…あれ？ 何か変な音がしなかった？」

「んっ…あっ…そ、そう…？ …んっ…気のせいっ…じゃない…？ …あんっ」

ベルの声にアイズは思わず手を止めるが自分の快樂に歯止めが利かずに再度手を動かす。何度も動かしていると触れると気持ちいい突起したものに気付きアイズはそこをいじる。他にもレフィーヤがベルのモノを入れられているところに指を差しこみアイズはその快感のとりこになる。視線はレフィーヤとベルの情事に釘付けになり右手は際限なく動かし、口からは熱い息が漏れていた。すでに下腹部から愛液が漏れており腰から下はびちゃびちゃになっている。

レフィーヤはそのアイズの様子に気付きうつとりとした笑みを浮かべながら自ら腰を振っていた。するとベルはなにか思ったのかレフィーヤの両太ももを掴みまるでアイズに見せつけるかのように開脚させる。

これにはレフィーヤも思わず赤面し、手で隠そうとするがベルは自らの膝でレフィーヤのふとももを固定しレフィーヤの両手首を掴み背に回し下に引っ張った。

「べ、ベルう…あうっ！ な、なんでえ…っ！」

「ほら、レフィーヤ。クローゼットを見てみて」

ベルはいたずらっ子のような笑みを浮かべ、クローゼットに視線を向けさせる。レフィーヤがアイズのことをバレたのかと少し顔をこわばらせるがベルが言っているのが鏡ということに気付く。

「ふえ…う… えっ、あっ、いやっ」

大きな鏡が自らの結合部をはつきりと写していることに気付くとレフィーヤは身をよじらせて逃げ出そうとするが

「ダメだよ、ちゃんとみなきや…ねっ！」

「んはああああっ!?!」

逃げ出そうとしたレフイーヤの手を離すとその手を腰に当て一気に腰を打ち付ける。レフイーヤはその衝撃からガクガクと身体を震わせて、何度目かも分からない絶頂へと至った。

「あ、あう……べる、こわれる……わたし、こわれる……」

「大丈夫だよレフイーヤ、もつと可愛いレフイーヤを僕に見せて？」

ベルはそういうとレフイーヤの耳を食む

「んぎゅっ!? あ、あぐ……っ！ べ、べるやめ、んぶっ」

耳を食まれたレフイーヤは歯を食い縛るような喘ぎ声をあげ、ベルへと抗議しようとしたがベルはレフイーヤの腕を後ろに回したまま抱き付くようにして腕を固定させ、空いた右手の指をレフイーヤの口へ入れた。二本の指で舌を挟んだりレフイーヤの口内をかき回す。左手は胸をやわやわと揉んでおり時折頂をいじる、腰は絶えず動いており。耳も甘噛みされながら舌でなぶられていた。

これが堪らないのはレフイーヤだ。

四ヶ所も同時に攻められており絶え間なく快樂が常に全身を貫く。到底耐えられるものでもなくこれは全身を痙攣させながら獣のような喘ぎ声を上げ続けていた。

「レフイーヤは口と耳が弱いからこれは凄いでしょ？ どうなの？  
ねえ……？」

「あがつ！ んんんっ！ んんおおおっ、おおおっ、おおおっ！」

しばらくそのようにしているとレフイーヤは突然くたっ……と意識を失った。

「レフイーヤ……？ どうしたの？」

「……う……あ……えう……」

「……」

ベルはにつこりと笑みを浮かべて両手でレフイーヤの膝裏を持ち、レフイーヤを持ち上げる。細身のベルでも恩恵のお陰か軽々と持ち上げ、自らのモノが抜けるぎりぎりまでレフイーヤを上げると

「ほら、起きて」

手を離した。

ごちゆんつという音と共にベルのモノがレフイーヤを突き上げる。

「——んああああっ!? んぎっ、ひうっ、あああああ……あああああ……っ!!!」

レフィーヤは目を見開き大きく後ろにのけぞり、腰をがくがくと痙攣させる。

「うぐっ……っ!」

その動きにベルも軽く体を震わせレフィーヤの中に白濁を吐き出す。

「は、はひ……しゅぐ……い……」

「あっ……あっ……ああっ……」

クローゼットに手をついているレフィーヤをベルが後ろから、俗にいう立ちバックの体位で激しく突いている。

ベルはレフィーヤがイッた回数は30回より先は数えてない。レフィーヤもベルが中に出した回数は20回より先は数えてない。アイズも全身が痙攣した回数が5回を超えた。

「ああ……またくる……、イツちやう……っ!」

「うん……、出すよ……っ!」

眼前で見せつけられているアイズの手も早くなり口からは荒い息と涎がこぼれる。もはや音が漏れることを気にしてないがベル達も気にする余裕がない。

「…… あっ、何か……くる。大きいのが……くる……こ、これが……イクって……こと?」

最早声も押さえられないのかアイズは口を押さえている左手を離し自らの胸を愛撫する。そしてレフィーヤとアイズは限界が来たのか全身を震えさせながら叫んだ。

「—————ッ!!!」

二人とも声にならないような叫びをあげ、くたたりと体の動きを止め

た。するとレフイーヤは何を思ったのかクローゼットに手をかける。アイズがそれに気付いたが最早体の物足りない火照りを止めることは出来なかった。

キィ… という軽い木の音と共にメスの匂いを漂わせながらアイズが現れ、レフイーヤはクローゼットの脇へと移動する。

「え… アイズ… さん？」

「ベ… ルウ…」

クローゼットから外へ出るといままでの伝った愛液が足に溜まっていたのか床につくと同時にべちゃつと音をたてる。アイズはそれをも無視し、ベルの元へ向かうが今までの自慰のせいか。かくんつと膝が折れる。

「アイズさんっ！」

ベルが二歩足を踏み出し、アイズを受け止めアイズはベルの胸元へと飛び込む。オスの匂いを発する裸のベルの上半身へ

「ーっ???!」

鼻から脳へと突き上げる香りの暴力。オスの匂いを鼻いっぱい吸い込んでしまったアイズは腰砕けになりながら全身を痙攣させ、再度愛液を滴らせる。

ベルもそのアイズの様子に気づき、自らのモノを強固にさせアイズの腹部に押し当てる。アイズもその当てられているものに目をうつとりと蕩けさせる。

その時、アイズの後ろにレフイーヤがしなだれかかる。アイズに届くレフイーヤの雌の匂いと背中に感じる熱

「ねえ、アイズさん…」

背中に寄りかかったレフイーヤから耳元に囁かれる。この瞬間だけは年下であるレフイーヤが年上のように感じた。ベルもアイズに抱き着くように距離を詰め。アイズは二人にサンドイッチされるようになった。

「今度は… 三人で、楽しませよう…？」

その言葉にアイズはごくりと喉を鳴らし、ゆっくりと首を

縦に、  
振った

## リユー編

### 疾風と恋（1）

「白髪頭いらっしやいだにやー」

「アーニヤさんこんばんは」

日が暮れ始めてそろそろ夕食時という頃

ベル・クラネルが豊饒の女主人の入り口をくぐるといつものようにアーニヤが出迎えてくれた。ベルはそのままカウンターへと案内される。

ベルがメニューを見ながらそわそわと何かを待つようになっていると後ろから優しい気な声色で声をかけられた。

「ベル」

「…！ リユーさん！」

探し人を見つけたベルは勢いよく立ち上がり笑顔で探し人の名を呼ぶ。表情は笑顔であり、元気よく振られる尻尾が見えるような気がする。

「んんっ」

その姿にリユーは頬を染め顔を少し逸らしながら目をつぶり、口を閉じて咳払いするかのような声を上げた。

完全に萌えに出会ったオタクの行動そのものである、よく見るとリユー以外にも同じような声を上げている店員や客がいた。

「…？ どうかしましたか？」

「…いえ、なんでもありません。ベル、明日は空いていますか？」

「はい、何もなければダンジョンに向かう予定でしたが」

「それはよかった。明日は私も何もないので久しぶりに一緒に行きませんか？」

「はい！ 一緒に行きましょう！」

二人はそういうとはトリユーは仕事に戻りベルはカウンターに座り注文をする。

「おい、『疾風』と『迅雷』だ」

「最速コンビね、確か互いに別のファミアリアだったかしら？」

「そうそう、ヘステイアファミアリアのLv4とアストレアファミアリアのLv5だ」

アストレアファミアリア、オラリオの治安維持を主に行っているファミアリアでギルドとの関係も深い。一時期闇派閥イビイルスとの抗争により甚大な被害を負ったが別ファミアリアの協力もあり持ち直し、今ではオラリオの有力組織の一つである。

対するヘステイアファミアリアは最近出来たファミアリアであり、構成員はなんと団長のベル・クラネルを含めた5名(リルルカ・ヴェルフ・命・春姫)。団長のベル・クラネルは最近冒険者になったにも関わらずすでにLv4、その速さと本人の敏捷から迅雷アタランテという二つ名を貰った(アストレア案)

迅雷が冒険者を始めた頃から二人で行動しており。冒険者から《疾風迅雷》と呼ばれて、ある程度の知名度を持っているコンビである。

「…にしても迅雷アタランテ、Lv4らしきがないな」

「うん、駆け出しみたいだし結構かわいい…ヒッ！」

二人を見ていた女性冒険者がベルに好意を見せた瞬間《疾風》からあり得ないほどの殺気が女性冒険者を襲う。即座に同僚のヒューマンから頭を小突かれ殺気は霧散したが視線は女性冒険者から外されていない。次粉をかけようとしたら狩る。というのがありありとわかる。

「《疾風》、べた惚れじゃん」

女性冒険者はぼそりと呟いた。

ベル・クラネルの朝は早い。実は朝が遅いリユートのモーニングコールのためである。

ベルは装備を整えると同じぐらいに起きて鍛錬をしていた命さんに挨拶をし、アストレアファミリアの《星屑の庭》へと向かう。

ベルが顔なじみになった門番さんに笑顔で挨拶してファミリア内に入るとさらに見知った顔がいたのでこれをかける。

「アリーゼさん」

「あらベル、今日も悪いわね。リユーならいつもの部屋よ」

「分かりました。それでは…」

団長のアリーゼと軽い会話をしてベルはリユーの部屋の前へと向かう、軽くノックをして反応がないのが分かるとドアをゆつくりと開ける。

そこには規則正しい寝息と姿勢をしているリユーの姿があった、最初の頃は寝間着姿や寝ているリユーの姿にドギマギしたものだが高ではもはや平常心だ。ベルは軽く肩を叩く。

「リユーさん、朝ですよ。起きてください」

「ーッー」

ベルの声にリユーは即座目を覚ますとそばにある木刀を取り、ベルの方に向けて振るう。ベルは慣れたように笑顔でその木刀を避ける。最初の頃はぶん殴られていたが今では慣れたものである。

「あ、ベル…毎度のことですが申し訳ありません…」

「大丈夫ですよ、今ではよれますし」

Lv4になってからようやくリユーの本気の攻撃が見えるようになり、最近になってリユーの攻撃を避けられるようになった。最初の頃はそのまま木刀でぶつ叩かれていたが今では死角からの攻撃すら避けられることも可能である。敏捷はすでにリユーを超えている、アビリティはSSだそうだが、どうしてそうなったのか。

「では食堂で待っていますので身支度を済ませたら来てくださいね」  
そう言っただけでベルは食堂に向かいリユーの食事を用意する。食堂の人とももう顔なじみだ。しばらくするとリユーが頭をゆらゆらしながら食堂へと出てきた。顔もどこか寝ぼけている。

「はい、リユーさん。あーん」

リユーを席へと座らせるとうつらうつらしているリユーにベルは



食事をとらせる。明らかに子供に対する対応だけど、周りの様子を見ているともはや見慣れた光景といった感じだ。

そしてダンジョンに潜る準備を終えると…

「さて、ベル。ダンジョンに向かいましょうか」

「はい、行きましょうか」

目が覚めたのかシャキツとしたリユーは装備を確認し、ベルへと確認を取る。ベルも準備が出来たのか笑顔でリユーに答える。

「今日はどこに行きましょうか？」

「久しぶりですし、リヴィラの街まで行きましょうか。体を慣らしましょう」

「そうですね、僕も最近休んでいたのです」

「では行きましょうか」

「はい」

## 疾風と恋（2）

「ハッ…ハッ…ハッ…！」

ベルはリユーを背負い上層への階段を駆け上がった。

リユーは荒く息を吐きながら赤面し、ベルの背中で熱に浮かされたような状態になっている。

「（僕の所為だ…！ 僕が無警戒に突っ込んだから…！）」

リヴィラの街に降り立ったベル達は体の調子を確認し、24層まで下りたのだ。

その階層を歩いているとベルは不思議な花を見つけた。リユーに似合いそうな綺麗な黄色の花だ。

「リユーさん、この花綺麗ですよ」

「ッ！ それはいけない！」

「えっ…」

花に背を向けリユーに声をかけたたん、リユーはベルを突き飛ばした。

ベルが驚愕すると同時にその花がピンク色の煙を吹き出し、リユーはそれをまともに吸い込んでしまう。

「リユーさんっ!! すいません！ 僕が勝手に…ッ！」

「はあ… はあ… 大丈夫です。それよりもあまりちかづく」

「毒消しのポーションです！ 効くか分かりませんが」

「ッ！」

ポーションを持ってベルが近づく、それを制止しようとしたが間に合わなかったようで…

「あ…」

とリユーは間の抜けたような声を出すと

「~~~~~ッ  
!?!???!」

全身をびくびくと震わせ、膝を着き気を失ってしまおう。

「リユーさんッ!?!」

最早悲鳴のような声を上げるとベルは毒消しのポーシヨンを見つめ、意を決してそれを自らの口に流し込む。

ごめんなさいリユーさん

ベルはリユーに口付けをすると舌で無理矢理口を開かせポーシヨンを流し込む。リユーの柔らかな唇の感覚にこういう時じゃない状況で感じたかったなと思うとリユーを背負い上へと走った。

元より敏捷には自信がありなんならLv5のリユーと同等の速度である。恐ろしい速度でかけあがりベルは星屑の庭を目指す。エルフに関する治療ならリユーに触れる事の出来るアストレア様やアリーゼさんがいた方がいいと思っただからだ。

一刻も経たずにベルはダンジョンを抜け汗を流しながら星屑の庭に到着する。門をくぐるとアリーゼさん達も異常に気付いたのか即座にリユーの部屋へと向かいリユーの装備を外してベッドへと寝かせてくれた。

「すみません：僕が無警戒に突っ込んでいったから：」

「話は聞いたけどそれは仕方ないわ、とところでどんな花だったの？花の種類を聞けばどんなものかわかるかもしれないわ」

そう聞いてベルは花の形状を思い出し、アリーゼに説明する。

「…みたいな形をしている黄色い花でして」

「ふむふむ」

「ピンク色の鱗粉のような煙を吐き出しまして」

「ふむふ…ん？」

「それを吸ったリユーさん、最初は大丈夫だったんですけど僕が近づいた途端に気を失ってしまっ…」

「…ほう」

ベルが説明し終わるとアリーゼはにんまりとした笑みを浮かべておりベルへとその視線を浮かべていた。

「それなら大丈夫、しばらく寝ていれば治るわよ。ついていてあげて」  
そういうことがあり、現在ベルはリユーの部屋で椅子に座って待機

している。リユーは先ほどとは違い、安らかな寝息を立てている。  
なんか…僕も…眠く…

私は意識を覚醒させると自室のベッドの上にいることに気付いた。  
恐らくダンジョンで気絶しベルがここまで運んだのだろうと推測し、隣で椅子に座ったベルが寝息を立てていることに気付き、口元を緩める。

だがその後にこの原因がベルと言うことに気付き何とも言えない表情を取る。

すると鼻にベルの匂いが僅かに感じた。それと同時

「んんっ」

まただ、今度こそ意識は失わなかったが全身に甘い刺激が走る。

『アフラディージアク』

媚薬草とも言われている花であり、中層の下に生えていると言われている珍しい花だ。その効果は『好意を持っている異性の匂いに反応する媚薬』である。例えばこれを何も思っていない異性の匂いを嗅いだとしても何も感じることはない。つまり…私は…

しかも気絶するほどの快感を感じた。それから導き出される答えに頬を赤く染める。

理解はしていた、私は関係ないと思っていた…でもこれは…

私はすやすやと眠るベルに近づく、ダンジョンにいた時と同じ装備であり。汗も恐らくかいているのだろう。ゆっくりとゆっくりと近づき、ベルの首元を嗅ぐ。

「~~~~ッ!?!」

全身が、震える

背筋を舐めまわすような快樂が全身を貫く

口から涎が流れ腰が砕けるようにへたり込む

気持ちいい…

口から熱い息が漏れて下腹部も熱くなる。

思わずしなだれかかるとベルがゆっくりと目を開ける。

「リユール……さん？」

「ベ……ル……」

もう、我慢できない

### 疾風と恋（3）

ベルは困っていた。突然リユウの様子がおかしくなったかと思っ  
たら突然ベッドへと押し倒されたのだ。

「リユウさ……」

「スウー……ハアー……」

リユウはベルの胸元に顔を埋めながら大きく息を吸っている。両  
手はベルの背中に回されており、時折股をベルの腰や太ももに擦り合  
わせている。

ベルはリユウが擦り合わせている腰に湿った感覚があり頬を染め  
る。

どうしたものか

ベルは己の愚息を強固にしないために精神を張りつめていた。間  
違いなく原因はあの花の粉、でもどうするか……

そうベルが悩んでいるとリユウは匂いを嗅ぐのをやめゆつくりと  
ベルの方を向く。

「ベ……ル……？」

「……ッ……」

ベルは見た、いつもキリツとした。それでいてどこか優しげな表情  
をしているリユウの顔がとろとろに蕩けた女の顔をしていることに  
「あ……」

ベルはこらえることが出来なかった。一般的なサイズよりも大きな  
ベルの愚息がそそりたち、リユウの秘所を服越しに強く刺激する。

「あ……ん……っ」

「……ッ……」

リユウの表情を見たとき。気が付いたらベルはリユウと体勢を  
入れ替え、リユウをベッドへ押し倒した。

「ベ……る……っ……」

「……リユウ……さん……」

「ん……う……ッ……」

ベルは貪るように口づけをし、口内を蹂躪する。リユウは抵抗せず

にベルの首に手を回し。その蹂躪を受け入れた。

「うあっ…はあっ…んむ…」

「ん…じゆる…りゅー…さん」

ベルの意識はもはや酩酊状態と言ってもおかしくなかった。

豹変したリユウ、そのリユウから香るこちらの情欲を煽る香り、表情、全てがベルの獣のような感情を煽っていた。

ベルはリユウの戦闘衣に指をかけると脱がす。完成されたその肉体にベルは頬を染める。

だが体の欲は収まらず、口付けをしていた口から僅かに離し。そのまま舌をなぞる様にリユウの体へ向かわせる。

頬を

「あん…」

首元を

「んんうっ…！」

胸を

「んうっ…あっ…」

「はあ…はあっ…はあ…っ！」

ベルはリユウの太ももをなぞり、濡れている下着をずり下ろし秘所へと手を差し伸べる。

くちゅりという音と共にリユウの体がビクンと大きく震えた。

「ふあっ…！」

「…かわいい」

ベルは思わずと言ったように口をこぼす、その言葉にリユウは大きく赤面した。

「べ…る。わ、私は…かわいいk「かわいい」」

秘所へと指を差しこみ、胸の頂を舌で舐る。可愛らしく鳴くりユウにさらに情欲が刺激される。

張り詰めたベルのモノがズボンを押し上げ、痛みを訴える。

「…」

「あっ…リユウさん…！」

リユウはいとおしげにベルのモノを撫で、ズボンの中に手を差し込

む。

直接ベルのモノを撫で、その柔らかな手で扱く。ベルは突然の快樂に腰が砕けるように力が抜け。それをリユーはもう片方の手でゆっくりと押し倒す。

ほすりと軽い音と共にベルは押し倒され、リユーは顔を怒張したベルのモノへと近づける。

「ここが…匂いが…強い…っ」

語尾にハートマークでも付きそうな甘い声を出し、ズボンを下げた。

リユーは分からないがベルの一般男性より大きなベルのモノとそれが放つ強烈なオスの匂いにリユーは全身を弛緩させ震わせる。

「あ…む…」

「う…あ…」

パク

リユーが口に咥え、頭を前後させベルのモノを刺激する。

口に入りきらずに奥に刺さるのか、えづいて涙目になっているが無理に喉奥を使い限界までベルのモノを押し込む。

「はあっ……」

「ひもひい…へふ？」

「う…あ…リユーさん…それは…くっ…出るっ！」

そんなベルの声と同時にリユーの口の中で彼のモノが弾けた。口の中に広がる粘った液体。放出した液体をリユーは美酒でも味わうかのように舌の上で転がし、飲み込んだ。しかし味なんかリユーには分からないし、そんなことはどうでもよかった。ベルが自分の口の中で絶頂した。それで満足だった。

そのままリユーはベルの隣に寝ころび。ぐちゃぐちゃになった秘所に広げ、ベルに懇願するかのようには言葉を投げかけた。

「べ…る…入れ…て？」

「…」

ベルはリユーへと覆いかぶさり、その怒張したものを



どちゅっ

一気に押し込んだ。

## 疾風と恋（4） 終

「あえ…？」

リユーのいままで男を受け入れたことがない所がぶつつつという何かを貫く感覚と共にベルのモノが差し込まれた。突然のことにリユーは一瞬顔を惚けさせたがすぐに顔を痛みにゆがめる。

「んぎイっ!? あ…っ！ ギ…イ…！」

リユーは涙を目に浮かべながらベルの背中にしがみ付く。ベルはその様子を見ながら慈しむかのように頭を撫で、その涙を舌で拭いた。

リユーの中が浅かったのか根元まで入りきらずベルは少し物足りなさそうだが最奥を突いたまま息を荒くしているリユーを抱きしめる。

「ふ…っ！ ふ…っ！ ……はあ…っ！」

「リユーさん…大丈夫…？ でも…僕も…ちよつと…我慢が出来ないかも…」

ベルは菌を食いしぼり汗を浮かべ、リユーの肢体に自らのモノを埋めながらリユーに告げる。

あまりにもベルのモノをリユーの中が締め付けるため一刻も早く快楽を貪りたいのだ、腰を動かしたいが苦痛に歪めたリユーの顔を見ていると動かすことが出来ない。それに気付いたのかりユーはベルの顔に手を当てる。

「私は…大丈夫…だから…動いて…？」

「…っ！ もう止まれませんからね…っ！」

蕩けたような声と普段見せない甘い表情に先ほどまで残っていた理性が打ち碎かれる。

ベルは両手でリユーの腰を押さえると大きく腰を引き、そのまま勢いよく突き刺した。

入りきらずにリユーの最奥を大きな水音と共に勢いよくノックする。

「ううあああああああッ！ ああ、あぐ、んっ、んア……………あッ！」

リユーはベルの高速ピストンにより背中をのけぞらせ、喘ぎ声を出す。ベルはその声を聴きさらに興奮を高め自らのモノをさらに強固にし、さらにリユーの喘ぎ声が大きくなる。

「リユーさん……！ 声が……！」

「む……むり……あ……っ！ 抑え……られんんっ！ ないい……ッ！」

「リユーさん……！」

「んむうっ！」

リユーの口をベルは自らの口で塞ぎ、舌を絡ませる。ただでさえ蕩けたリユーの顔がさらに蕩けベルの首後ろに手を回し自らも舌を絡ませる。吐息と腰を打ち付ける音、そして淫らな水音が部屋に響く。

「あ……でる……抜かな……ッ！」

「……ッ」

「あっ、リユーさん……！」

ベルの体が震え、モノを抜こうと腰を引こうとするとリユーが足をベルの腰に絡ませた。ベルは抜くことも出来ずにリユーの中へとその欲望を放出した。

「う……あ……っ！」

「あ……っ……でて……る……っ！ い……くう……っ！」

ベルが数回体を震わせゆっくりと腰を前後させる。リユーもベルが体を震わせるたびに体を震わせた。

ベルの体の震えが止まるとリユーに体を預けるように体の力を抜く。リユーはベルの顔を見て慈しむような笑みを浮かべると口づけをする。

「べる……だいき……！」

「……ッ！ そんなに煽られると……！ もう絶対に止まりませんからね

……！」

「あ……っ、また……固くなって……ん……っ！」



のまま眠る様に意識を飛ばした。

「え……あ……？」

「おはよう、リユースさん」

リユースが目を覚ますと裸の状態でベッドに横たわっていた、隣には肘をついたベルがリユースの横に寄り添っている。リユースは先ほどの痴態に顔を赤らめて布団で顔を隠す。

「べ、ベル……さっきのことは……」

「可愛かったね……リユースさん」

「べるう……！」

リユースが真っ赤になりそれをベルが微笑んで見ているとふとリユースは思い出したかのように布団から飛び上がる。

「あ……シーツも服も変えなきゃ……あ……声……」

互いの体液でドロドロになったベッドと服を見ながらあわあわさせていると鈍っていた感知能力が戻ったのか入り口の方へと視線を向けた。

「あ」

「あ」

「あ」

そこにはこちらを真っ赤な顔で見ているアリーゼと輝夜、それとアストレアの三人がいた。どれほどの前からいたか分からないがベルがニコニコとしているので、ベルがリユースが気づく前から気づいたこととの証明となる。

「べ……べる……い、いつから……？」

「リユースさんが僕のモノで大きな声を上げていた頃からかな？」

「……ッ！」

リユウの顔が真っ赤に染まっていく中見ていた三人は

「じゃ、じゃあ私達はこれで…」

「待って！ 待ってください…！ 話を…！ 話を聞いてください…！」

リユウは布団を体に巻き三人を追っていこうとするが、ベルはそのリユウを背中から抱きしめる。

「リユウさん、また夜に会いに行きますので…泊まる場所を今から決めていた方が良いでしょう？」

「…っ！ ベル…！」

リユウは赤面になってキツとベルを睨むが怖くはないし拒否すらしていない。

ベルはもはや吹っ切れたのか獲物を狙う目をしており、にっこりと微笑みながら舌なめずりをした。

「また…楽しみましょうね、リユウさん？」

その日の夜、街のどこかでリユウの喘ぎ声が響き渡ったのは言うまでもないだろう。

## アイズ編

### 剣姫は性に興味津々です（1）

「~~~~♪~~~~♪」

ここはロキファミアリアのホーム『黄昏の館』

その一室で剣姫ことアイズはクルクル回り鼻歌を歌いながら姿見の前にいくつもの服を持っていき、自らの体に重ねて確認している。

「…凄く楽しそうね」

「そうだね、だってアルゴノウト君とデートでしょ？」

入り口から顔を出しアイズが服を選ぶのをアマゾネスの二人は顔だけを出しながら見た。いつものような笑みを見るとアマゾネスの二人はお熱いねー。と言いながらその場を去った。

アイズ・ヴァレンシュタイン、剣姫と呼ばれている少女は服を選び終わると食堂の方へと向かう。

「…おはよう、リヴェリア」

「ああ、おはよう。ん？ その格好は… ああ、今日は彼と逢い引きだったか」

「うん」

そして笑顔を見せるアイズにリヴェリアは感慨深いなど目を細める。

戦いのことにしか興味のなかったアイズが華やかな服を着て誰かと出掛けるといふ普通の少女のようなことをしている。アイズを見守ってきたリヴェリアとしてはホッとするのであった。

… まあ、それに関しての弊害も起きてはいるが

「あ、あ、アイズさん…なんで…なんで…」

「なんでやアイズたん… しかもよりによってドチビの…」

テーブルに突っ伏している二名を見てリヴェリアは額に手を当てて溜息を吐く。

アイズを慕っているレファイヤーに主神のロキ、もうアイズが彼と付き合い始めて半年も経つというのにいまだに逢い引きというテー

ブルを涙で濡らしている。

「まあそれは向こうも同じか…」

向こうの鍛冶屋に話を聞くとサポーターと主神が涙を流しているらしい。どこも変わらないな…

アイズが小走りで待ち合わせ場所の噴水に向かうと少年が噴水のそばのベンチに腰かけていた。

黒いシャツに白いジャケットを着た年下の少年がいた。兎のような白い髪に紅い眼をしたその人物はアイズを視界に入れると立ち上がりこちらへと駆け寄ってきた。

かわいい…

アイズはその姿を見てふと思った。

「アイズさん、おはようございます」

「おはよう、ベル」

挨拶を済ませるとベルはそつと手を出しアイズはにっこりと笑ってその手に自分の手を重ねる。

「じゃあベル、早速行こう」

「はい、まずはどこに行きましょうか？」

今回はアイズがデートプランを考える方だったのか、ベルの手を引き街へと繰り出す。

「ベルはもうすぐLv5になれるんだっけ」

「はい、でも神様が短期間すぎるから少し見送るそうです」

恋人繋ぎをしながら冒険者らしい会話をして、服屋を巡る。

剣姫と白兎の脚ということに気付き店員さんが驚いたりしたが割愛させてもらう。

「はい、あーん」

「…ベル、恥ずかしい」

現在はオーブンテラスで昼食をとっている、ベルはオムライスのス



ブーンですくいアイズの前に笑顔で差し出す。アイズは頬を染めジト目をベルに向ける。

「こういうのは嫌？ アイズ」

「…こういう時のベルは意地悪…あむ」

アイズは頬を染めたままベルの Spoon に食いつく、その様子をベルは笑顔で見ている。

ベルはアイズをからかうときだけアイズを呼び捨てにする。それはアイズも理解しているので何をされるのかと頬を染めてしまう。周りの店員や客が微笑ましさや恨みのある視線を二人に送りながらも二人は食事は終えた。

「ベル、今日はこれを試してみたい」

「…あの、アイズさん。何度も言ってますけどこれは街中でやるものではないです」

アイズがベルに見せているのはちよつとアダルトな雑誌、ロキファミリア内に隠されていたのを持ってきたらしい。その1ページを指さした。その書いてあったのは

『フレンチキス』

ベルは思わず額を押さえた。フレンチキス、所謂ディープキスである。

アイズは性の知識に疎い、ロキファミリアの面々がそういう知識をシャツトダウンしていたからだが…

ベルと付き合うようになり、アイズはその辺に興味を持ち始めた。一線は超えていないが既にキスは済ませている。キスは大丈夫だと思っただのかアイズはキスの先に行きたいようだ。

「あのね、アイズさん。アイズさんは16歳だし僕に至っては14歳だ。まだこういうことは早いと思うしせめて後二年ぐらいは…」

「んっ」

アイズは目を瞑って唇を軽く突き出す。

俗にいうキス待ち顔というやつだ、思わずベルは顔を赤くする。

「あの…アイズさん」

「んー」

「…はあ」

ベルは軽くアイズに口付ける。相変わらずの柔らかく気持ちのいい感触にベルは嬉しい気持ちになり。アイズの頸後ろにそつと背中を回す。

いつまでたつたかさつと口を離す。視線を向けるとアイズも頬を染め幸せそうな笑みを浮かべる。

しかし惚けた顔が戻ると同時ぷくーつと頬を膨らませる。

「…舌を入れてくれなかった」

「だからまだ早いと…」

そういつてベルが離れようとするアイズがギュツとベルの体強く抱きしめる。

「…舌入れてくれないと離さない」

「アイズ…」

「ん〜」

ベルがあきれたかのようにアイズの名前を呼ぶとアイズはせがむように唇を突き出す。

「…もう、うまくできるか分からないよ？」

そうベルは呟くと再度アイズに口付けた。

その後ゆつくりとアイズがおどおどと口を少し開く

「…」

ベルはアイズが逃げないように頭の後ろにそつと手を置き、舌を差し込む。

僅かに開かれた歯の隙間に入れ、アイズの舌の表面をなぞる。

「ンン…ッー」

アイズが思わず頭を引こうとしたので下がろうとする頭を押さえ逃げないようにする。

「ん…アイズ、舌。出して」

「は…ん…っ」

怖いのかびくびく震わせながら舌を伸ばしてきたのでベルは舌で絡めとる様に自身の口へと導く。

酸素を消費しながら舌を何度も絡ませる。息を互いに荒げながら

軽く息を吐くと口を離す。

互いの口から銀色の糸が伸び、ぷつんと糸が切れて互いの胸にかかる。

「は……っ……す……ぐい……ふう」

「…凄いや顔になってるね、アイズ」

とろつとろに蕩けたアイズを顔を見てベルは加虐心を非常に煽られ、再度アイズに口付ける。

抑えられなくなったのかベルはアイズの頭を強く抑えて貪るように舌でアイズの口内を蹂躪した。

「ん……ふっ……べる……ひど……」

「アイズが…煽るのが…悪い……」

ぢゆる、ぴちやという水音が人気の少ない公園に響く、ある程度続けるのとベルは正気に戻ったのかハツとしたような顔をして口を離す。

「あ、アイズ…大丈夫…?」

「ふ…はあ…はあ…す、すごい…♡」

そのアイズの様子にベルは再度口を寄せようとしたが流石に止める。

「落ち着いたらそろそろ帰ろうか。ねっ? アイズ」

その後、トロトロになったアイズを膝枕し。ロキファミリアへと届けた。

フィンとリヴェリアが温かい視線を送っていた。

#### 数日後

「…用意は出来た?」

ディアンケヒトファミリアでアイズは一つのポーションを用意してもらっていた。

「できましたが…何に使うんです?」

「…秘密」

小さなポーション瓶に入った液体をいとおしげに眺めながらアイズは人差し指を口に当てた。